

# 文芸サロン作品集



2022年4月

シニアネット福岡

(SNF)

文芸愛好会

私の好きな俳句

宮 由枝

春の雪茹でて蕪かすらのすきとをり

《長谷川 權》

目刺しより藁しべを抜く春の雪

《長谷川 權》

手毬突く石の仁王に唄聞かせ

《宮津 昭彦》



私の短歌

宮 由枝

年月に根を張りのべし大桜そのひとときの花をいとしむ

なかほどに山吹ひとむら華やげば誘はれのぼる石段高き

梅檀の紫うすき花あまたあふげる大樹空かをらすか

鮫鱈は鍋にせむとてぶつ切られ冷ゆる店先身の鮮らけし

わが庭に生れし胡蝶か育ちてもひねもす去らぬ春も逝きつつ



時々ふと思う。マスク生活の異様さのこと。マスクと縁が切れない。どこへ行ってもみんなマスクを着けている。子供も例外ではない。幼時体験として人々がマスクを着けている姿は幼い子供の脳みそにその姿が刻み込まれる。マスクは本来異様なものである。ほんの三、四年前までは、日常、まれに出会うもの。老いも若きもみんなマスクなんてありえない光景であった。

まるで下着のごとく、日常的にマスクをつける。ところが、外食し、店を出る。何メートルも行かないうちにハツと気がつく。マスクなしで店を出ていた。道行く人がみんなマスク。マスクなし、これはいかん。慌ててマスクをつける。こんなことがなんどかあった。

芝居や映画でドロボーや強盗となると、きまったように覆面をしていた。マスクではなくて手ぬぐいで口元と鼻を隠す。眼だけは出す。これで人相がわからない。顔の半分以上を隠す。つまり、もし見つかつても人相がわからないようにしたのである。実際のドロボーが手拭いで覆面をしたのかどうかは知らない。映画演劇の上でのわかりやすい演出としてやったのかな。

そして今や、顔で見えているのは眼と眉間ぐらいの世の中。これで帽子でも深くかぶられたりサングラスをかけられると、もう顔がわからない。

中でも口元が見えないのはえらく不便、おもしろくない。顔にはいろんな部品がある。とりわけ、口元は人に強烈な印象を残す。人の顔を覚えたり、あれはべっぴんさんと評価したり、いじわるそうな人だねとヒソヒソ話をしたり、一向にあか抜けしないねえと悪口を言ったり。その人物評価は口元によるところが大きい。相手の気持、感情を読み取るのも口元。嫌がっていた、喜んでいた、悔しそうだったなどなど。それが今とんと見えない。見えないまま想像するしかない。コミュニケーション上困ります。

話は飛ぶが口元といえば食事の時の口元。これはちよつと厄介。つまり品格品位にかかわる怪しげで微妙な部品である。つまり食べ方の品格、品よく食べるか品悪く食べるか。テレビで食べる場面がやたら多い。食べる音こそ聞こえないが口の開け方、閉じ方、噛み方、かじり方、ほおばり方にいかなものかと思わせる人がいる。もろに育ちが出るような気がする。

大笑いしたとき口元を手で隠すしぐさをする。大笑いだけでなく何か恥じら

いめいたことがあったり言ったりした時、やたらと口に手をやる。口元や口の中は見せてはいけない秘境なのかな。

そういうえば、宮中の晩餐会、食べる場面がテレビにはめつたに生まれせんね。撮影はごちそうが並んでいる場面かその直前までで終わり。食べる姿、なかでもモノを口に入れる瞬間、その口元はあまり人さまに見られたくないらしい。育ちが出るというより、人間は動物であり、食べ方次第で獣であることを瞬間見せてしまう恐れがある。ちよつとこれは怖い。アラアラしい。やんごとなき方々の食事光景は見たくとも見られない。

口元と関係深い言葉として「食べる」「いただく」がある。「食べる」は人間と動物の共用。「いただく」は人間様専用、動物には使わない。「いただく」という言葉、男性が使っているのを聞くとき品があつてほのぼのとする。ほかに食する、食らう、かつ食らうがありますね。  
ご馳走になる、この言い回しは美しい。お見事。

思ひ出話は取扱注意

山本 為三

小学校1年生。クラス編成で特殊学級に入れられた。虚弱児など心身ともに虚弱な子供のクラスである。身長が相当低い。どのくらいか記憶はないが要するにえらくチビだった。我が家の長男をこんなクラスに入れるとは、親父が怒って学校に文句を言った。多分学校に出向いて直談判したと思う。背がいたって小さいが、どこにも欠陥はない、なんで特殊学級か、そういうクレームだったのだろう。

新入生のクラス分けは学校にとっては重要業務。それにクレームが来たのだからそれなりに厄介なクレーム。今ならクレーム騒ぎ。奏効してまもなく普通のクラスに移った。身長何センチ以下は虚弱児として特殊学級に入れる、まあこういう規定があつたのかな。体格、体力など普通以下にはそれなりの教育方法があるというのだろう。普通以下と普通を一緒くたにするよりも分けた方が学年の運営上都合がよいとの考えもあるう。

で、四十年ほどたって小学校の同窓会があつた。当時の先生数人も参加されていた。クラス替え騒動にかかわりのある女性の先生もいらした。頃を見計らって

その先生の前に進み出て、しばし雑談、そしてその節はどうも新入生のクラス替え騒動を話題にした。覚えていらっしやいますかとの問いに覚えがないとおっしゃった。食い下がり気味に質問を続けるうちに先生はやっとそういうこともあったかなとおっしゃった。

追及したわけじゃない。雑談のネタである。軽い気持ち。でも先生はちょっと迷惑顔。懸命に記憶をたどっておられた。記憶がよみがえったわけではない。そういうこともあったといわないと面倒くさいと判断されたのだろう。大昔のトラブルを持ち出して、悪いことをしたなあと大いに反省。

別の同窓会。小学校で好きな先生の一人とおしゃべりをした。その先生は授業が始まると机やいすを壁際に寄せて床に円を描いて相撲大会をする。取り組みは先生が決めたのか記憶にない。が、えらく強い奴が四人いた。勉強そっちの先生の先生は始終にこにこしていた。この相撲の時、女の子はどうしていたのか、覚えていない。男だけのクラスだったのかな。

勉強よりも相撲のほうが記憶に残っている。横綱四人はやたら強かった。授業そっちのけのせいかな、この先生は大好きな先生の一人になった。

同窓会、宴たけなわ、先生の前に進み出て 教室相撲の思い出話をしながら、やおら「先生、僕を覚えていますか」と尋ねてみた。「覚えていない」いともあっさりのご回答。ガクツ。好きな女の子からの一発回答のごとし。そんなもんかなあ、そんなもんだろうなあ、先生業を何十年続ける、転勤もある、よほどのことがない限り子供一人ひとり覚えられない。ものすごく勉強ができて手のかからない子供、またはその逆なら覚えんでもないよ。どっちもつかずで、その他大勢の中の一人なんか憶えられるわけがないよ、先生はそう言いたかっただろうな。思い出話はむつかしい。



走れない、泳げない

山本 為三

走りは苦手。いや、嫌い。記憶では中学高校ではやたらと走ることが多い。あれは体育の授業の準備運動のかなあ。準備運動なら体をほぐしてくださいと、ゆっくり走ればよい。ところが運動場一周とか校外に出て学校のまわり二周となるといつの間にか競争心が出て、競走状態になる。それは先生の狙いかもしいないが私はギブアップ。一番最後ドンベエで行こうと最初から決める。ゆっくり走るといふよりイヤイヤ走っている。他の生徒が猛烈に抜かしていくとき耳と首筋に風圧がかかる。風を切る音が聞こえる。先生から見ると走る気のない無気力な奴が一人いる、態度の悪い生徒、こいつはへげ ×印。

高校か中学か記憶はないが1000m走の検定みたいなものがあった。全員参加である。走りはしたが、なんと1000mの長いこと。走れども走れどもゴールに到着しない。まだか、まだあるのか、なんでこんなことをするのか、文句たらたら、20秒か30秒、学校の平均記録をガクンと落としたかも。先生に目を付けられ嫌味を言われ、ずいぶん手を焼かせた。

泳ぎ、これも不得意、泳げない。泳ぎは嫌い。それでも小学生のころ、近所の子供たちと電車に乗って海水浴に行った。大人が何人かいた。舳いである小舟の下にもぐって反対側に出る潜りの遊びをした。船底に頭をぶつけその痛さに息が切れて危うくおぼれそうになった。海水を飲んだ。恥ずかしいから誰にも言わなかった。

そんなことで海が嫌いになったのか。ともかく誰も泳ぎを教えてくれなかった。教えてくれといったこともない。父親とも一緒に海に行ったが親父が一人でスイスイと泳いでいたのを覚えている。

電車から降りて海に向かうと独特の香りが漂う。潮の匂いである。これが嫌い。泳げないのに海に行くのか、そんな思いで夏を過ごしていたのかなあ。

家族を持って、子供を連れて海に遊びに行っただけに思っているが、孫ができてこちらが無理やりつれられた格好で海に行っているが、孫と海で楽しんだ記憶がない、何をしたのか記憶が乏しい。泳げないから海の家で昼寝をしていたかもしれない。孫はあきらめていた、いやあきれていただろう。

プールというやつも縁遠い。海外旅行で豪華なホテル、プールも素晴らしい。妻らはひと泳ぎした後、プールサイドの長いすで寝そべっているが、こちらは食堂で何かをかじっている。ジュースがうまい。

泳げないことは罪深いことである。

### 桜の季節は鮎の味

三 島 武

昭和三十四年の春、私は日南高校にいた。

日露戦争時代に活躍した小村寿太郎外相の銅像と一緒に、ほぼ満開になった校庭の桜を眺めていた。

この校庭から歩いて五、六分のところに、亡くなった母の実家はあった。低い茶の木が垣根になった平屋建ての家からも、高まりにある高校の桜は、眺めることができた。

この家には、祖母と看護婦の叔母と飫肥中学校で事務をしている叔母の三人が暮らしていた。

この時は私一人で、高校入学の報告にと、真新しい学生服と学帽姿で福岡から訪れた。小学校入学直前に父と訪ねた時と同じ列車の長旅をして……。

夕刻、看護婦の叔母と油津でデートをすることになった。

夕食は寿し屋で御馳走になった。初めてカウンターに座り、大きな湯飲み茶碗で熱いお茶をすすりながら、大将が目の前で握った鮎を、珍しげに食べた。確かに美味しかった。油津の漁港に上がった新鮮な魚を目の前で握ってくれるのである。美味しいはずである。

それにもまして、感動したのは、生れて初めてのカウンター越しの握り鮎。お箸を使わずに食べた大人の味であった。

昼間の桜と夜の鮎。今もこころに残る、十五歳の春の味である。

### 三つ葉ツツジ

三島 武

庭に沈丁花の花が咲き始めました、とカメラ仲間からメールで画像が送ってきた。

我が家にもあるはずだと庭を見ると、庭石の奥に確かにあった。赤茶色の蕾の塊の突端に、白い小さな花を一、二輪咲かせて群生している。陽気が良くなると、更に白い花が咲きだしてくるはずである。香りは、まだ届いてこない。

そうだ、彼岸花が必ず秋の彼岸に咲いてくれるように、三月になると忘れることなく咲き出してくれる三つ葉ツツジがある筈だ。今年も直近の寒さのせいで梅の花も遅れていると聞いていたので、まだかなと思いつつ庭の左隅を見ると、ピンクの蕾を沢山つけてサツキの上から顔を出していた。

これなら私の誕生日の三月八日には、いつもの通り満開になるだろう。

この三つ葉ツツジは、還暦旅行で女房と訪れた霧島温泉で買い求めたものである。小さな苗木であったものが四、五年もすると淡いピンクの花が咲き始めた。今は背丈も大きくなり、決まって三月の始めには咲いてくれる。

我が家の庭には、お袋の実家から贈られた榎の大木を中心に、左には山茶花の木が、右には池に流れ込む滝がある。この滝は娘たちが幼い頃、親父が池は危ないからと言って、枯山水風にして以来水は流れていない。池の横には、池を覆うように松が横たわり、更にその横には、雪がうっすら積もると人の顔みたいに風情を出す、名付けて雪顔岩がある。

この庭は四十数年前、家を建てた時に一緒に造った。サツキを時々植え替えたが、枯れてしまった梅の木を除いたりはしたものの、大きくは変わってはいないが、付け足したものがある。

山茶花の他に春の色物が、春の香りが欲しいと、沈丁花を植え、そして十八年前に三つ葉ツツジを植えた。この二つの花木は、剪定されることもなく大きく育ち、我が家に憩いを加えている。

今や私の誕生花となった三つ葉ツツジ。たとえ家族が私の誕生日を忘れても、この花は時が来れば祝ってくれるだろう。

果たして、私は、いつまで見ることが出来るのだろうか。(2022年2月)

